映画 日大闘争

16mm パートカラー
長編ドキュメント 50分

製作 日本大学全学共闘会議 映画班

警棒が我々を乱打し
冷たいに放水が頭から浴びせ
シュプレヒコール 壁とヤジ怒号の跳梁が学園から我々を隔てる中で、舞いあがって
右翼暴力団と無能教職員が我々の眼の前で学園を作個している 今、
問題の一つなのか、我々のなぐり出した問題の一つなのか、無視され踏みにじられ
圧殺され 問答無用の暴力支配、正常化が強行され
古田体制は最後の居直りを、学生弾圧理事の総長への就任と、
古田自からの『会頭』から『会長』へ名目的変更によって完成しようとしている 今、

6000の負傷者 //
2000の捕められた友 //
500余日の我々の叫い //

一切を歴史のかなたに葬り去ることによって、一切を自分性の鋳型に流し込むことによって、抑圧者と収奪者の高笑いが釣に学園に響く 今、
死の地獄にも細分化された戦列の中から、絶望的観念の中から、
そして何よりも重い自からの沈黙の中から、鋭利な刃物を、役にたつる武器を
創造しなければならない 今、
流された血と 強いられた沈黙の代償として、収奪者の鼻柱をへし折るまで闘争をたたかい抜くために

映画 日大斗争は、何よりも我々自からの斗いの伝統に、勝利へのあくなき確信の証左 斗争宣言として 今 登場したのだ。

芸術によって政治を斗おうとするものだとしたら、全ての芸術は政治的に着色されなければ心安まらぬ。スターリニストは、古田と同じく打倒される対象であることを、まず最初に宣言しておこう。我々の斗いとは、我々の表現すべてを不当と歪曲し抑圧し収奪する全ての秩序に対して、永続的に抵抗し、拒絶し、打倒する内発性を我々の権力として、実体として構築し得るかどうかにかかっているのである。我々の表現とは まさしくそのような自己権力に動かされるものであり、日本大学を、国家権力を、そして何よりも我々の斗いをのみこむ者 絶対に止まらぬであろう //

1969年9月 日本大学全学共闘会議 映画班

連絡先 (379) 1837